

---

ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N - **過去編**

オオガラス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ARMORED CORE 2 ANOTHER AGE - A・I・N - 過去編

### 【Nコード】

N7876Z

### 【作者名】

オオガラス

### 【あらすじ】

その人が傍に居たから、自分はまだ、ここにいる……

## レイヴン

あの時の事を 今でも覚えてる

初めて乗った AC

初めて握った レバーの感触

初めて嗅いだ 硝煙の匂い

そして …

初めて人を殺した 瞬間

『驚いたな……』

人を殺した でも それを咎める声は無い

あるのはただ 驚嘆の声だけ

レイヴン試験

レイヴンになるための通過点

要するに 人殺しになれるかどうかのテスト

今行われているのは まさしくソレ

テストの内容は単純

市街地を荒らし回っているMTの排除 これだけ

そのバカを たった今 破壊した…殺した…

『お前の年齢で これ程ACを操れるとは……』

回線越しに聞こえる男の声 このテストの試験管

手助けはしちゃくれない 失敗したら死ぬと言った

この男もまた レイヴンだった

『……解った 実力は十分にあるようだな』

テストの終了 同時に男の口から発せられた

レイヴンになった者なら誰もが聞くセリフ

新しい人殺しを歓迎する言葉 レイヴンの証

『認めよう 君の力を 今この瞬間から 君はレイヴンだ』

自分が人殺しの仲間入りをした 今日がその記念日 …

// // // // // // // // // // // // // // // //  
// // // // // // // // // // // // // // // //



10歳になったばかりの頃

唐突に突き付けられた言葉

病院のベッドの上で告げられた

見知らぬ人からの言葉を

小さな頭で理解するまでに

長い長い時間を必要とした

「今日からここが 君の家だ」

退院してからすぐだった

そこもまた 見知らぬ場所

「…ここ…どこ？」

「君の 家だ」

静かに 噛み砕く様な言い聞かせ方

そして 他の質問は一切許さずに

強引に手を引かれ 中へ連れ込まれた

その 孤児院とは名ばかりの

豚小屋のような 最悪な場所に

いや 豚小屋の方が まだマシ……

「……や！」

そこは まさに地獄だった

「離しっ……！」

人権無し 安らぎ無し そして 人で無し

こんな所にいるくらいなら 死んだ方がマシ

雨の降りしきる中 そこを逃げ出した ……

「いたぞ……！」

「こつちだ！ 逃がすな……！」

後ろから聞こえてくる男の声に

怯えながら それでも足は止めない

息は切れ切れで 心臓は痛くて苦しい

でも止まらない 捕まりたくない

速度を上げる 息が切れる 足がもつれる

裏路地を走る 曲がり角を曲がり ひたすら走る

豚小屋  
あの場所を逃げ出してから 1年近く経つ

現状は あまり変わってはいなかった

要するに いつ死んでもおかしく無い

ゴミを漁り 物を盗み ただその日を食い繋ぐ

そして 今日……

「見つけたぞ！！！」

ついに 見つかった

「あッ」

後ろを振り向き走りだす

焦りで足が絡まり転んだ

でも寝ている暇なんてない

立ち上がって駆け出す

足が重い

目の前が揺らぐ



息が出来ない

そして  
…

「ああ！」

…道が…無い

「…あ…あ…」

壁にしがみつく

爪を立てて壁をよじ登る

「くっ……！！」

ダメだ 何度やっても登れそうに無い

手が滑って掴まれない 指も掛けられない

「この先は行き止まりのはずだ！！」

「あっちだ！ 追い詰めたぞ！！」

2人の男の声に 小さく悲鳴を上げた

捕まる その結末が目に見えて

歯をガチガチ鳴らして震えていた

「…あつ…あ…や…」

嫌だ 捕まりたくない！

嫌だ 嫌だ 嫌だ！！

「あの先だ！」

迫る声 足音 人影

震える体 手 足

もう1歩も動けない

「ほら」

それは突然だった

「…………えっ?!」

壁の上から差し伸べられる手

「掴まれよ 追われてんだろ？」

あとはがむしやらだった

その差し出された手を掴んで

壁を蹴って蹴って滑りながら

それでも蹴つて壁を登った

「あつ あれっ?!」

「……消えた」

壁の向こうから聞こえてきた

今まで追つてきてた男達の

呆然とした呟き

「……おじさん……だれ？」

見知ら人に抱きかかえられながら

裏路地から 日の当たる表通りに出た

「お兄さん……だろ？」

不機嫌そうにその人は言った

「……おにい……さん？」

だから言い直した そしたら笑った

嬉しそうに笑って 頭を撫でてくれた

多分初めて 誰かの優しい手に触れた

気がついたら 泣いてた……

そのお兄さんは レイヴンだと言った

「レイヴンってなに？」 って聞いたら

お兄さんは笑いながら 「強い奴の事だ」

って言った 「なにする人なの？」 ってまた聞いたら

今度もまた笑いながら 「何でもやるよ」 って答えた

だから言ってみた 「……だったらさ」

お兄さんは首を傾げて 「ん？」

「ハンバーグ作ってよ!」

「…ハ…ハンバーグ？」

お兄さんは ちょっと困った顔をした

「できないの……？」

悲しくなった ウソツキかと思った でも

「OK 楽勝だ」

って言って作ってくれた……嬉しかった

でも……

「うっ……」

…ハンバーグは…マズかった

それから そのお兄さんと暮らす事になった

始めはちょっと どうして良いのか解らなかった

だけど すぐ慣れた とても楽しかった時間

そのお兄さんは 家に帰ってこない時もあった

その時は寂しいけど 必ず帰ってきてくれた

帰ってきた時は 本当に嬉しかった

それから1年経った

いきなりお兄さんが言った

「ケリを付けてくる」

何の事が解らず ただ頷くしか出来なかった

でも 必ず帰ってくる そう思っていた

頭を撫でてから お兄さんは出ていった

お兄さんの帰りを ただ待った

いつまでも いつまでも……

でも いつまで待っても 帰って来なかった

行方不明だと言われた 死んだと聞かされた

そしてまた 一人になった ……

少しして知らない人が来た

この家の場所を使うんだと言って

そこを追い出された また元に戻った

帰る場所も無くなった 待つ場所も無くなった

…何も…無くなった……

その日の残飯を漁ってる時だった

知らない男に声を掛けられた

またアイツらかと思って走りだした

でも ダメだった 腕を掴まれた

「見つけました」

端末越しに 男は誰かと話をしてた

「はい 恐らく」

見下ろす男の顔は無表情で

とても怖かった 震えていた

だから逃げ出そうと暴れた

でも 全然振りほどけなかった

とても力が強かった 人間じゃないみたい

「解りました」

その男は頷いて 誰かとの話しを終えた

ああ もうダメか そう思ってたら

「君は」 その男はしゃがんで言った

視線を同じにして　でも　その目が冷たくて  
とてもとても怖かった

「一緒にいた人に　会いたくはないかい？」

それがお兄さんの事だってすぐに分かった

だから頷いた　何度も何度も頷いた

「……………会いたい」

「どこにいるか　解るのかな？」

「……………解らない」

「だったら　探せば良い」

「どつやって？」

「レイヴンって　知ってる？」

「……………うん」

「だったら君が　レイヴンになれば良い」

「……………なんで？　無理だよ……………」

「もしレイヴンにならないなら　このまま死ぬだけだよ？」



「…………嫌だ…………」

「君を助けに来る人は もういないんだからね」

…嫌だ…死ぬのは…嫌だ…

「…………レイヴンに…………なる」

「良い子だ」

男はそう言って 頭を撫でてくれた

でも その人の手は 酷く冷たかった……

そして 5年が経った

一発の銃声が鳴り響く

それに続き 3発のミサイル

次々と目標となる敵に直撃し 破壊する

溜息を吐く 緊張がようやく解ける

動く物が何も存在しなくなる 自分以外

そのまま踵を返し その場を後にする

依頼を一つ達成

あれから5年 レイヴンとしての実力も上がり  
それに連れて 名前もそこそこ売れ始めていた

この年でレイヴンって言う珍品扱いもあって

企業からの依頼もぼちぼち来るようになり

一人でそこそこ稼げるようになっていた

でも 探している人は もう見つからない……

レイヴンをやってお兄さんの事を知った

?レオス・クライン?と言う男を追って

衛星?フォボス?に行き そして消息を絶った

恐らく すでに生きてはいないのだろう

でも ACから降りるなんて今更出来ない

だから今日も 何かを奪い殺すのだろう

あの時から 何も変わることも出来ずに……

『君に この依頼をお願いしたい』

バレーナ社からの遣いの男　今回の依頼主

『LCCが所有していた　この建物の調査だ』

目標の場所と　時間と　依頼内容を告げた

『難しい依頼ではないと思うが　どうかな？』

ただの調査　こんなに簡単な依頼を受けない手は無い

「解った　引き受ける」

『よろしく頼む』

目標の建物は？アーデンリバー？にほど近い場所にあった

到着すると　すでに10機近くのMTと1体のACが待機していた

なんだこの大部隊　大袈裟すぎやしないか？

そんな事を考えていると　1機のMTが近寄ってくる

「話しは聞いている　君がもう一人のレイヴンだな？」

「ああ　そうだ」

「よしこれで揃ったな　では出発する」

短いやり取りを終えると　大行進が始まった

AC組は MT部隊の最後尾につくことになった

調査は何事も無く順調に進んでいた

依頼内容は調査だったが実質は護衛だった

MT部隊が調査の大半を引き受けていた

だからそれを ボーっと眺めていた

不意にもう一人のレイヴンから

不躰な呼び方で声をかけられる

「おい ボウズ」

自分に向けられた呼びかけだと

理解した瞬間 反射的に口から出た

「……なんだよ オッサン」

それが あのひととの出会いだった

## 出会い

「オッサンね……」

男は鼻を鳴らして呟いた

「なんか用？」

ぶつきらぼづに言っつてやる

ガキ扱いする奴は嫌いだ

「お前に一つ忠告」

「……なに？」

「もし死にたくなかったら 気を抜くな」

「……どう言う意味？」

「すぐに解るさ」

忠告なんて される覚えもない

ましてや今の実力なら余裕だろ

自分の力を過信していた

だからオッサンの言葉も

当たり前の様に聞き流した

外周をMTが調査し終わると

今度はAC組の出番だった

建物の中を端から端まで調べ尽くす

そこは 何の施設だったのか知らないが

かなりの大きさと広さを有していた

だが 動いている物は何も無く

ただ 重く鈍い足音だけが響いていた

「 …よし こちらは異常は無い」

「 こちらは異常無し」

あらかた見て回ったが 結局何も見つからなかった

『了解 その辺で良いだろ』

隊長機のMTから無線が返る

程なくして 調査の終了が宣言された

「今回の調査 何が目的だったんだ？」

これだけの大部隊での調査 普通では考えられない

あまり人様の事に首を突っ込むもんじゃ無いけど

どうしても気になってしまった

『……ああ 気にするな』

「なんで？」

『良いんだ 何も無いのなら それで』

まあ 当たり前だけど 何も教えてくれなかった

『調査は終了だ こちらに来てくれ 揃い次第 帰還する』

「……解った」

そこで この通信は終了……の筈だった

通信を終了しようとした瞬間 ほんの小さくではあるが

確かに爆発のような音が聞こえた 何だ？

『どつした！？ 何があった！！』

隊長の男の 驚きと焦りを伴った叫び声

一体 何が起きているんだ?!

「どうした?! 何かあったのか?! さっきの爆発は?!」

『 …… レイヴン! 大至急こちらに来てくれ!!!』

「どうした!?!」

『は…早く!! ヤツが…ヤツラが…!!!』

そこで通信は途切れた 聞こえるのは耳障りなノイズ

「何か起きたみたいだ!!」

隣のレイヴンに話しかけようと 振り向いた時には

「先に行くぞ」

すでに飛び出していた

「…あつ…何なんだよ一体……」

舌を打ち ぼやきつつもその後を追う

そして MTの部隊が待っているであろう場所に到着

「なんで!?!」

そこにはMTのカタチなど一つも無く ただ残骸が転がっていた



「何があつたんだ！？ 誰か！！」

呼びかけに答える者は誰もいない

機体からはまだ 煙が立ち昇っている

たった今まで戦闘が行われていたように

突然の轟音 その正体を理解する前に

真横に突き飛ばされていた 尻餅をついた

「何す……！！」

突き飛ばした相手に文句を言おうと 真横を見た

まさに目の前を 今までいた場所を何かが通過した

「いつまで寝てる気だ さっさと立て」

一瞬 何が起きたのか理解できなかった

呆然と 目の前のオッサンの乗る機体を見上げる

「何…が？」

オッサンは答ええない ただ睨みつけていた

？何か？が飛んできた方を ジッと見ていた

立ち上がって オッサンの見る方に目を向ける

「……………何だ……………あれ？」

そこには 3体のACが立っていた

でも そいつらの機体構成が不明だった

今まで見たことも無いパーツで構成されていた

そして 3体とも同じ配色をしていた

気味の悪い 血の様な赤と 闇の様な黒

「やっぱりな……………」

オッサンが呟いた

「アレを知ってるのか!？」

その問いに オッサンは答えなかった

代わりに鼻で笑うと続けて言った

「まあた出やがったか」

そう言うや否やマシンガンを撃ちながら

赤と黒のACに向かって疾駆する

「…お…おい!!」

イキナリ事態は急展開

何が起きているのか理解も出来ない

でも ボサツと立ってる訳にもいかなかった

破裂音と共に迫る 2つのミサイル

そして 1体の赤と黒のAC

「そっちは任せたぞ！」

はい！？ 思わず目を丸くする

「任せたって…え！？ ええ!!？」

突然の幕開け 何も解せぬまま戦いが始まる

しつこく追ってくるミサイルを

何とか回避したのもつかの間

轟音が響いたと思ったら

次に巨大な火の塊が襲ってくる

レバーを引いてブーストダッシュ

全速でその場から後ろへ下がる

「うわっ！！！」

足元で火球が弾けて機体が吹き飛ばされる

「グ…グレネードランチャー?!」

爆風で舞い上がった土煙で 視界が遮られる

薄っすらと 土煙の中に巨大な影が浮かび上がる

何なのか解らない 突然現れた?それ?に向けて

右手のプラズマライフルを出鱈目に撃っていた

だが 今まで確かにそこにあつた影が一瞬で消える

「…ど…どこへ?!?!」

音が聞こえた 空気を焦がすような音

「えっ?」

振り向いた時には遅かった

「……えっ?」

長く赤いものが振り上げられていた

「…ブレー…ド？」

頭が認識を拒否し 心が麻痺していた

現実を直視することを拒絶した

ここで本当なら 死んでいたのだろう

…

「そつちは任せたぞ！」

鈍色のACの中で男は 未熟なレイヴンに向けて叫んだ

赤と黒のACは 鈍色のACを挟み込むように展開した

鈍色のACはその場で佇んだまま 身じろぎ一つしない

赤と黒のACは ほぼ同時にグレネードランチャーを撃つ

だがそれを読んでいたかのように 鈍色のACは宙に飛んだ

行き場を失ったグレネード弾はそのまま直進する

赤と黒のACは お互いが放ったお互いのグレネード弾を

これを何事も無かったかのように回避する

それを狙っていたか 動きの止まった赤と黒のACへ

鈍色のACは頭の上に着地して そのまま踏み潰す

赤と黒のACは その重みに耐えられず地に伏せる

鈍色のACは 地に伏す赤と黒のACに向けて

左腕のブレードを振り上げ そして叩きつけた

右手のマシニングを放ち もう1体の足を止める

ブレードでコアを貫かれた筈の赤と黒のACが

鈍色のACに向けてグレネードを構える

不可解だった 通常であれば中の人間は死んでいる

その筈なのに赤と黒のACは 未だに活動を続けていた

それを 鈍色のACは当然と受け止めていた

赤と黒のACが構えたグレネード その砲身を掴み

放たれる前に斬り落とした そしてマシニングを

地に伏した赤と黒のACに向けて銃口を構える

「良いから 寝てろ」

2度3度 機体が跳ね上がるかの様に暴れた

沈黙した機体を見下ろす その目は何処か悲しげだった

次に男は顔を上げて そして舌を打った

片割れのACが 赤と黒のACに背後を取られていた

マシンガンを構え 男は大声で叫んだ

「伏せろ!!!」

「伏せろ!!!」

その声に 頭よりも体が反応した

機体をその場にしゃがませると

赤と黒のACに 銃弾の礫が幾数も

幾百幾千も火花を撒き散らしている

それでも赤と黒のACは動きを止めない

「ぼさつとするな! 動け!!!」

オッサンの声に反射的に右手の武器を構える

プラズマライフルを赤と黒のACに撃ち込んでいた

この至近距離　まず外す事は無い絶対の射程

だが　そんな甘い考えを打ち破るように　機体が消えた

「そんな?!」

有り得ない!!　ほとんどゼロ距離からの射撃

それを躲すなんて絶対に不可能なはずだ

でも赤と黒のACは　それをやってみせた

余裕の動きで距離を離す　まるで馬鹿にする様に

次は当てる　敵をロックする　FCSが敵を捕らえる

ロックオンマーカ―が表示される　だから撃つ

でも　当たらない

「なんで!!?!」

ロック　撃つ　ロック　撃つ　ロック　撃つ

「当たれ!　当たれ!!」

今までそうしてきたように

赤と黒のACにロックして撃つ



ちゃんと狙って引き金を引く

出来てるちゃんとやれてる

なのに全てを躲された

まるで当たらない

「…な…んで…?」

ちゃんとロックしてるじゃないか…なのに…何で!!!?

声を上げていた 絶望に叫んでいた

まるで駄々っ子の様に泣きじゃくっていた

「当たらない…なんでだよお…」

一発も当たらない…このままじゃ…

「…イヤだ!!!」

脳裏に浮かんだ不吉な単語を振り払う

相手に狙いを定める ロックマーカ―カーが動く

相手を捕らえた事を知らせる 引き金を引く

…カチンと 空々しい弾切れの音が響いた

「…あ…あ…あ…」

どうする!?! どうする!?! どうする!?!?

あと残っているのは……そうだ! ミサイル!

ミサイルならアイツにも効くはず!

ディスプレイを叩いてミサイルを選択する

視線を上げて そして絶望に悲観した

視界が 赤と黒の2つの色で覆われていた

「しまっ……!!!!」

そのまま地に押し倒される

それを退かそうと必死に足掻く

カメラに映ったのは 奴の光る目

そして 振り上げた左腕とブレード

「…あ…や……」

死に魅入られた瞬間 手足が震え 体が動かない

あとは 左腕が降りて 刺されて それでオシマイ

この予想は外れなかった 赤と黒の左腕が降りてきた  
目を閉じる 視界が暗くなる 多分 きつとこのまま

…………… オカシイ 嫌でも浮かんだ最後の結末

それが いつまで経ってもこない

そつと目を開けてみる

光が飛び込んでくる 生きてる

外を見る 状況が見えてくる

驚きに悲鳴にも似た声を上げてた

確かにブレードが突き刺さっていた

刺されていたのが赤と黒のACで

刺していたのは鈍色のACだった

「どつ言っ……………」

状況が掴めない これは……………なに？

混乱する頭 そこに飛び込んで来る一つの声

「あんまり手間を取らずな」

それは オツサンの声だった

「…え?…え??」

もしかして…助けられた…?

鈍色のACはブレードを引き抜くと

『さて…』 と言つて振り返る

視線の先には最後の赤と黒のAC

いつの間にか傍観者になっていた

鈍色のACがマシンガンを撃ちながら赤と黒のACに迫る

だが赤と黒のACは当たり前の様にその銃弾の雨を躲す

今度は赤と黒のACの動く先に マシンガンの予測射撃

被弾した赤と黒のACの足が止まった

そこに鈍色のACがミサイルを2発撃ち込む

撃つと同時に鈍色のACがブーストダッシュ

それを赤と黒のACはグレネードを構え迎える

グレネードが放たれる直前 鈍色のACが弾けた

OBを発動して一気に赤と黒のACとの間合いを詰める

放たれたグレネード弾の脇を抜けながら

鈍色のACはマシンガンの連射

被弾 被弾 被弾 被弾

仰け反る赤と黒のACに 鈍色のACがブレードを振り上げる

驚嘆した 赤と黒のACがカウンターのブレードを振った

これは躲せない！？ 当たる？！

その予想は外れた 動きを読んでいたかのように

鈍色のACは 赤と黒の刃をやすやすと躲してみせた

そのまま鈍色のACは 赤と黒のACの背後を取る

マシンガンを相手の背に押しつけて撃つ

逃げられる距離ではない 射程0の連射

そして マシンガンを撃ち込んだ場所に

今度はブレードを突き刺した

赤と黒のコアから火花が上がる

そのままヒザをついて崩れ落ちた

鈍色のACは それを見届けると

後ろを振り返って歩き出した

だが 赤と黒のACが動いていた

膝をついたまま 右手がゆっくりと動く

後ろを向いたままの鈍色のACへ向け

グレネードを その砲身を構えた

「後ろ!!」

咄嗟に叫ぶ その声と同時に鈍色のACが振り返り

赤と黒のACに向けマシンガンを構え そして撃つ

マシンガンは幾数もの薬莖を飛ばしながら

赤と黒のACを鉄屑へと姿を変えていく

火花を散らし 体が仰け反り 動きが止まる

その最中 赤と黒のACが最後の一撃を放った

絶叫の様に 雄叫びにも似たグレネードの轟音

それと共に 赤と黒のACも 炎を上げて沈んだ

## 目標

全ての赤と黒のACを 文字通り一人で倒した男

その傍らで佇んでいた 歯を食い縛りながら

「……なんで」

悔しかった 情けなかった

自分の今の實力なら 誰が来ても敵じゃない

そんな事を考えて そして何も出来なかった事実

「……なんでアンタは あんなのと戦えるんだよ」

それは ひがみ だったのかも知れない

「……なんでアンタ倒せるんだよ!? なんで!?!」

今まで自分一人で生きてこれた 戦ってこれた

「ロックだつてちゃんとしたし……狙いもつけた……」

見てよこのプラズマライフル! 高威力の最新型なんだ」

ACに乗ってれば何だつて出来た 人よりも上手く操縦できてた

「でも当たんなかったんだよ……なんで!?!……なんで……」



声が詰まる 涙で視界が歪み 上手く話せない

自分は強いと言う自負が 悉く崩されていった

「…………ボウズ」

今まで沈黙していた男が 口を開いた

その口調は静かだが 圧倒されていた

「お前 戦いを何だと思ってる？」

「…な…何って…」

「性能が良ければ強いのか？ 威力が高けりゃ負けない？」

「ああ！そうさ！！」

「狙いをつけた ロックオンした それでも当たらないだと？」

「そうだよ！ 狙いはつけた！ ロックもした！

ちゃんとロック表示も点いた あとは撃てば当たる筈なのに……

きっとFCSが壊れてたんだ…でないか…こんなことには…」

「バカだろ？ お前？」

オッサンは小さく鼻を鳴らした

それに頭にキて怒鳴ろうとして

「FCSが壊れてたって？」

オッサンは馬鹿にした口調で続けた

「そうじゃないか！ そうに決まって……」

「FCSに ？どうぞ撃つても良いですよ？」

なんて言われないとお前は撃てないのか？」

それが当たり前だ それがACを操ることだ

そう言い返そうとして でも言葉が出なかった

「弾を当てたきゃ先を読み それでも当たらないなら当たるまで近付け」

「……でも……さっきは！」

「近くても当たらなかった？」

「ああ……！」

「お前のその頭はなんだ？ 目は？ 耳は？

機体の左手はなんだ？ 右手は？ 足は？

ただの飾りか？ 止まってなきゃ当てられないか？」

「違う！！！」

「だったら使え 相手の動きを見ろ 音を聞け

機体が弱けりゃ頭を使え 機体が良けりゃ腕を磨け

相手だって生きてんだ 黙って当たってくれる訳無いだろ？」

唇を噛む 何も言い返せない

自分は機体を操ってたんじゃない

機体の性能に甘えていただけだった

その時初めて思い知らされた

「当たる じゃなくて 当てる 自分の意思でだ」

「……自分の……意思で？」

「ああ 自分の意思でだ 戦況を読み 読んで支配しろ

お前がお前の力で 戦場をコントロールするんだ」

「戦況を…支配…」

「そつだ そして機械に頼り過ぎるな」

「……頼るなって…でも！」

「もしお前が死んでも 機械は責任を取っちゃくれねえぞ？」

それは機械を言い訳にするなって事か

自分の意志で自分が戦って 自分の意志で殺せ

つまりそう言う事なんだろう

「死にたくなかったら 腕を磨け」

オッサンの言うことは確かにそうだ

正論だ 理屈は分かる その通りさ

「……でも…怖いよ…」

さっきの光景を思い出していた

目の前まで迫っていた死を

「アンタは怖くないのか？！」

こんなバケモノみたいなのと戦って

死ぬかもしれないんだぞ！？」

気がつくとも体が震えていた

「…アンタ…怖くねえのかよ…」

自分の体を押さえる 震えを止める為に

でも 押さえたその手も 震えいていた

「…………そりゃ怖えさ」

沈黙のあとで オッサンがそう言った

「下手したら死ぬんだ そりゃ怖い」

「…アンタ…でも…?」

「勿論」

意外だった あんだけ強いのに怖いと言う

臆面も無く怖いものを怖いと口にした男が

「でもな 死ぬかもしれないからって

ナニもしないんじゃ どのみち死ぬぞ?」

「……………だったらどうすれば……………」

オッサンは 「簡単さ」 と笑った

「死にたくなけりゃ 戦えば良いんだよ」

「でも」 それになおも食い下がる

「……諦めたりとか…しないのか？」

「諦める？」

「機体が動かなくなったりとかしたら……」

「なるほどね」 オッサンは苦笑の声を漏らした

「そうだったら アンタだって諦めるだろ!？」

オッサンは溜息を吐いた 駄々っ子に困った親の様に

「ボウズ 良い事教えてやろうか？」

「…良い…事？」

それに頷く 「聞きたい」 そう告げる

「戦いつてのは？もうダメだッ!？つて所からが本番なんだよ」

その言葉の意味が分からず首を捻る

もうダメなら そこでもう終わりじゃないか

でもオッサンは それは違つと首を振つた

「どんなに機体がスタボロでも 動くんなら戦つ

戦えるなら勝つ　それが　レイヴンだ」

それに納得できなくて　口を開きかけたら

オッサンが言った　「警告音が鳴るだろ？」

機体があと少しで機能停止するトコまで行くと

コックピット中に警告音が鳴り響く　その事だろう

「……………うん」

あの音は嫌いだ　もう　何も出来なくなるから……………

「あの警告音が　ホントの戦いの合図だ」

でもオッサンは　自分の考えとはまるで正反対だった

思わず目を丸くして　素っ頓狂な声を上げてしまった

「……………あ…合図!?!?　でも……………」

「そこから本気を出せるようになったら一人前」

「本気……………?」

意味が解らなかった　そこまですなったら　後は死ぬだけ

そこから本番だなんて　無駄な足掻きなだけじゃないか

そんな考えを見透かされたように オッサンが笑った

「なに笑ってんだよ！」

オッサンは 「わりいわりい」 と笑い混じりで謝罪の言葉

それに少し腹が立つ 何だか子供扱いされたみたいでムカついた

「今は解んなくとも 生きてりゃそのうち解るよ」

飄々としたオッサンの物言いに 毒気が抜ける

その感じが何だか懐かしい 既視感を覚えていた

不思議な安心感 いつの間にか腹立ちもなくなってた

「……そんなもん？」

「そんなもんだ」

「……そっか」

「そっだ」

ホントに 解る時が来るんだろうか……

「それよりも今は 腕を磨け」

不意にオッサンの真面目な声音に



思わず居住まいを正していた

「死にたくなけりゃ 強くなれ」

「強くって……どこまで？」

その質問に オッサンは言葉を止めた

何だか悩んでいるように感じられた

それもつかの間 オッサンは笑いながら

「ソイツらを軽く倒せるようになるまで」

さっきオッサンが破壊した赤と黒のACを指した

「……コイツラを？」

「そうすりゃ 強くなったって証拠だ」

それはオッサンにしてみたら 冗談交じりだったんだろう

確かにコレを倒せりゃ強くなったって分かるだろうけど…

「コイツに目を付けられたら それは？イレギュラー？の証なんだ」と

「え？」

「まっ 早死にしたくなかったら気をつけるんだな」

何事もやり過ぎない様に　そう付け加えてよこした

「…あの…そのイレ…何とかってなに？」

「あ？　ああ…それはな…」

オッサンは何故か照れくさそうだった

喋る言葉をどもらせながら　「強い奴の事さ」　と言った

一瞬　いつか聞いた言葉と　同じ言葉を思い出す

もう　2度と会えないであろう　あの人の言葉を

「ん？　どうした？」

「……何でも無い」

バレないように　目を擦る

不意に　小さくコールサインが鳴いた

自分のかと思って見てみただけど違った

オッサンが言った　「悪い」

どつちら向…この通信だったらしい

「どうした？　？ネル？」

続いて女性の声が聞こえた

「敵の反応の無い今のうちに 離脱して下さい」

それにオッサンは「解った」と告げて通信を切った

「……………今のは？」

それにオッサンは得意げに答えた

「ああ ? ネル・オルター? 最高の オペレーター パートナーさ」

「信頼してるんだ」

オッサンは照れくさそうに 「まあな」 と答えた

「それじゃ 生きてたら またな」

それに頷く 「……………うん……………また」

鈍色のACが背を向けて そして走りだした

「……………必ず」

それから数年後 火星に別れを告げ 地球に下りた

?アリーナ?にも登録し 晴れてランカーになった

……そこで彼女に出会った

「初めまして」

彫像のように整った 氷像のように冷たい

「君の名前は？」

ニコリともしない 無表情で無感情な女性

「私はニーナと申します」

地球で出会ったこの女性が 最高のパートナーになるのか

「貴方が死ぬまでのお付き合いですが よろしくお願いします」

最悪のパートナーになるのか 今はまだ解らない

「……まあ……ヨロシク」

でも 願わくば ……

## 誕生日の夜

「……おにいちゃん？」

それは 突然の出会いだった

12歳の誕生日の夜

外はどしゃ降りの雨

その日 帰らぬ父を母さんと待っていた

「必ず帰る」

それだけを言い残し 数年前父は家を出た

父の肩書きは科学者……だったらしい

確かに何かの研究をしていたのは覚えてる

でも それが何の研究だったのかは解らない

あの人は 何も教えてはくれなかった

部屋の扉も 堅く閉ざされて久しい

そんな父から いきなり報せが届いた

「明日 戻る」

たった1行の文

明日 つまり今日

そんな父の言葉を信じ

ただただ 待ち続けていた……

無数の雨粒と強風が窓を叩いていた

テーブルの上にはケーキが乗っていた

それは僕の12歳の誕生日を祝うケーキ

時刻は9時をとくに過ぎていた

だと言うのに母さんの料理には手を付けずに

帰ると告げた父を 母さんと二人で待っていた

「今日は風が強いわね」 母さんは言いながら

冷めた料理を温め直そうとキッチンへ消えた

僕はすることもなく 窓の外を眺めていた

無数の雨粒が窓にこびり付き 強風が窓を叩く

ガタガタと心を不安にさせる音を奏でている

申し訳程度に生えた木々を激しく揺さぶっている

だというのに 部屋の中は妙に静かだった

静かというのは語弊か 寧ろ空々しさがあつた

雨風の音は酷いのに 時計の音が嫌に耳に障る

その理由は分かつてた もしかしたら父は

今日も帰って来ないんじゃないかと言う不安

そして諦念が 部屋の空気を重く虚しい物にしてるのだろう

母さんも僕と同じ事を考えているんだと思っている

料理を温め直すという母さんの行動が 心情を如実に物語っていた

恐らく戻ってきたら母さんは 「さあ 誕生日を始めましょう」と

繕った笑顔で 寂しそうに言うだろう 帰らない父を思いながら……

でも 僕のそんな浅はかな考えは見事に裏切られた

不意に低い唸り声にも似たエンジン音

それに続き甲高い音 ブレーキ音だった

僕は椅子から飛び降りると 駆け出していた

母さんも気付いたのか キッチンから小走りが出てきた

玄関の扉を 母さんと二人で凝視していた

もしかしたらと思う反面 そんなまさかと考えていた

今まで音沙汰も無かった父が そんな今更帰ってくる筈……

「……………ただいま」

ゆっくりと扉が開く 全身に雨粒を垂らしながら父は佇んでいた

目深に被った帽子からも雫が垂れ落ち 口ひげまで雨に濡れていた

顔には疲労の色を濃く滲ませていた 重い塊のような溜息を吐いた

記憶の中の父よりも 目の前の父は少しばかり痩せ瘦けて見えた

「……………父……………さん」

それ以上の言葉が出せなかった

誕生日に 約束通り帰ってきてくれた父に喜ぶよりも

本当に帰ってきたと言う驚きの方が僅かに勝っていた

なにより 久しぶりの父に何を言えば良いのか分からず



おかえりの一言を告げるのすら ままならなかった

父と目を合わせられず 視線を下げた時 違和感を覚えた

何だろうと首を捻る 父の着る薄茶のコートを握る手があった

父の後ろに隠れる小さな手 僕の手よりもなお小さい

不思議そうにその手を見詰める僕に気がついたんだろう

父は優しい声で後ろに隠れている子供に 出てきなさいと促した

姿を見せたのは 怯えた瞳で上目遣いにボクを見つめる小さな女の子

長い髪は雨に濡れて 顔や額や頬に張り付いていた

年は僕より少し下に見えた 小動物の様に震えていた

母さんはいつの間に取りに行ったのか

タオルを二枚持っていた 一枚を父に差し出す

母さんは膝立ちで 「いらっしやい」 と女の子を手招いた

女の子は父を見上げ 父はそれに頷いて女の子の背中を軽く押した

恐る恐る近寄る女の子を 母さんは優しく抱き留め 顔と髪を拭いた

「その子の名前は？リアン？」

帽子を母さんに預け 顔と髪をタオルで拭きながら

父は淡々と ロクな説明も無くボクに告げた

「ロウ 今日からお前の妹だ」

「……………はい？」

「……………おにい……………ちゃん」

その日からいつもの日常が一変した

「…リ…アン？」

「…は…い…」

……………困った 僕はとつても困っていた

少し話しかけただけで泣きそうな顔になる

その顔を見て また何も言えなくなる

「お前の妹だ 兄としてしっかり面倒をみる」

説明も無いまま家族が増えて 説明も無いまま妹ができた

その事に 特に何も意見を言わない母 それが不思議でならない

「えーと……」

「……うう」

長くて深い溜息を吐く

何を話して良いのか解らない

それはリアンも同じなんだろう

何かを言いかけて 口を閉ざす

そしてまた口を開いて その繰り返し

なのに 僕から話し掛ければ泣きそうな顔をする

正直に言うと 僕は気が重くて仕方なかった

なかなか慣れない妹 この1歳年下の女の子を相手に

僕はどうして良いのか まるで解らないでいた

「……リアン？」

……でも何故か

「えーと なに？」

僕の服の裾を掴みながら

「…あ…う…」

トコトコと後について来る

「お兄ちゃん！」

リアンと過ごして 2年が経った

「起きろお！」

2年も一緒だと さすがにお互い慣れてくる

そして 慣れてみて解った事 それは……

「こらあ寝ボスケ！ 起きろって言ってるでしょ！！！」

リアンは とても元気の良い女の子だった と言う事だ

「目 覚めた？」

リアンが寝ている僕の腹目掛けてダイビングヘッドを決める

腹を押さえながらのた打ち回る僕に 馬乗りになりながら

リアンは無邪気にモーニングコールをするのが日課だった

呼吸困難で臨死体験を毎日味わうのは正直どうかと思う

僕は荒い呼吸を呻き声と一緒に吐き出しながら

恨みがましい眼差しでリアンを睨む

当のリアンは首を軽く傾げながら

不思議そうに僕を見下ろしていた

「リ〜ア〜ン〜!〜!」

「なに？」

「いつも言ってるだろ！ 起すんなら普通に起せ!〜!」

リアンは怒られているというのに

まるで意に介さず快活な笑い声を上げてる

「笑い事じゃな……って コラ 聞け」

リアンは僕に覆いかぶさりながら

ベットの上で足をバタバタさせる

「だから聞けって」

「うーん？ 聞いてるよー？」

人の話しも聞かず リアンは思いっきり抱きついてくる

溜息一つ もう良い 諦めました

抱きつくリアンの頭に手を乗せ 軽く撫でてやる

慣れてみて解った事 リアンは元気の良い女の子だった

……それと とても甘えたがりな女の子だった と言う事だ

そんな ドタバタした日常にも

いつの間にか慣れていた頃

「……………え？」

その些細な出来事は起きた

「開いてる…………？」

父さんの部屋の扉が 僅かに開いていた

今まで入るなと言われていたし

何よりドアには鍵が掛かっていた

その時 好奇心には勝てなかった

この部屋には何があるんだろう？

父さんは何の研究をしているんだろう？

色々知りたいと思う心が ドアノブに手を掛けさせていた

「…………へえ」

恐る恐る足を踏み入れ 手探りで部屋の明かりを点けた

父の部屋は 思っていたほど散らかってはいなかった

もしかしたら 母さんが掃除していたのかもしれない

そんな事を考えながら 部屋の中を見まわす

本棚には意味不明な本が沢山収納されていた

その蔵書の山を見まわしていると

資料だろうか レポートが目に入った

【被験体の術後と副作用について】

それが その資料の題名だった

「被験体？」

何かの実験だろうか？

パラパラと 数ページめくってみる

書いている事は やはり意味不明だった

【IMITATIONをPLUS化する事により

稀にはあるが 記憶障害を引き起す場合がある

これは 記憶を転移させた場合にも起こり得る事である

十分に注意して頂きたい

例外として ORIGINALならば耐える事が可能

これは フィリアルで実証済みである】

「イミテーション？ プラス？？」

まるで訳が解らない 何の事だ？？

次のページを捲ろうとした時だった

「ん？」

その資料の中から 1枚の紙切れが落ちる

「設計…図？」

それは恐らく ACのパーツのように見えた



まあ ACとMTの区別なんてつかないけどさ

その設計図を 少しだけ広げて見てみる

頭と腕と体と足がついている それしか解らなかった

その設計図の隅っこの方に 小さく何か書いていた

【Nine】

「Nine…ナイン…9？」

このACだかMTだかの名前だろうか？

「9?…変な名前…」

「誰だ？ 何をしている？」

突然の誰何の声に体が飛び跳ねる

扉の開く音を後ろに聞きながら

僕の体は彫刻の様に固まっていた

「……ロウ？」

「父…さん…」

僕の現状は言い訳できるモノではなかった

「ココで何をしているんだ？」

「あ…の…開いていたから…つい…」

シドロモドロの返答しか出来なかった

怖くて後ろも振り向けずにいると

「ココには入るなと言った筈だな？」

きつと怒られる それも激怒だろうな

僕は目を閉じて振り返りながら頭を下げた

「ごめんなさい…！」

でも 予想に反して父は怒鳴る事はしなかった

「私の部屋には2度と入るな 解ったな？」

諭すように 静かな声で父は言った

そして僕の頭に手を乗せると 軽く叩いた

「……はい」

それに小さく頷くと 父は目を細めて僕を見た

「よし じゃ リアンの所に行ってやりなさい」

「…は…はい！ 言い付け破ってごめんなさい！」

怒られなかった安堵と リアンの名前で気が抜けた

僕の謝罪に父は小さく微笑んで 頷いてくれた

リアンが家族になって 数年が経った

「リアーン」

リアンがそこにいる

それが当たり前の日常

「おい 出てこーい」

それがこれからも続き

それが 変わらない毎日だと思っていた

…失うとは 思いもせずに…

「リアン………？」

…その日を境に リアンは 姿を消した…

「御願います！ 妹を…リアンを探して下さい！！」

「解った解った 探してやるから帰りなさい」

監警局に 探してくれるように頼み込んだ

でも 返る言葉は素っ気無いものばかりだった

話しもロクに聞こうとせず 入り口で追い返された

「人探し？」

監警局が探してくれないんだったら

あとは レイヴンに頼るしかない

「お金だったら幾らでも出します！ だからお願いします！！」

「幾らでもって……おいおい」

お金さえ払えば 彼らはなんでもしてくれる

そう聞いた 確かにその通りだった でも…

「100000C 最低でも…だ」

「100000C?!」

数字と言う名の残酷な現実を

ただ 思い知らされたただけだった……

「父さん！ 何でリアンを探そうとしないんですか！？」

何より不可解だったのが 父さんが探そうとしない事だった

まるで 初めからこうなる事を 予想していたかの様に……

「……リアンの事は 諦めなさい」

「諦める?! 何で!？」

父の顔に浮かぶのは 諦念の表情

もうどうにもならないと 父は言った

「良いんだ これは仕方の無い事なんだ……」

仕方が無い その言葉に僕の頭は血で沸いた

良い訳があるか！ リアンは僕の妹だぞ!？

「フザケルナ!!」

父の胸ぐらを掴み 声を張り上げる

これが 僕にとっての最初の反抗

「何にも教えてくれないくせに 諦める!？」

勝手に連れて来て 何も話さず妹にして

いなくなったら諦める!？ 冗談じゃない!!

部屋を飛び出す それを引き止める父の声

「リアンの事は忘れるんだ お前が辛い思いをするだけだぞ！」

「ウルサイ!!」

そんな言葉 聞く気なんて毛頭ない

忘れる!？ 辛い思い!？ 何を今更!!

「それに…お前一人でどうするつもりだ？」

……僕一人？ それこそ 何を今更

手段なんて とうに決まっている

「この世で誰も リアンを探さないって言うなら」

きっとリアンは泣いている

寂しがりで甘えん坊のアイツは

心細くて泣いている筈だ だから………

「オレがアイツを 見つけてみせる」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7876z/>

---

ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N - 過去編

2011年12月29日04時50分発行